

「人間の叡智」から「自然の叡智」へ

上 廣 榮 治

三月二十五日に名古屋の東側に広がる丘陵地帯で開幕される愛知万博のメインテーマは「自然の叡智」だといえます。「人間の叡智」ではなく、「自然の叡智」です。叡智とは「深遠な道理を悟ることができる才知」のことですから、もともと人間の能力を指す言葉であったはずとすると、「自然の叡智」というのは少しおかしな言い回しですが、今日を生きる私たちの「気分」をよく表わしています。

現代の日本人は、自分たち人間の叡智について、もはや自信をなくしているように思えます。人間が知恵を絞つてもろくな結果にならない。人間も自然の一部なのだから、結局は、自然の摂理を超えることはできない。だから「人間の叡智」ではなく、「自然の叡智」に従うべきではないか……。愛知万博のテーマはそんな時代の気分を反映しているのでしょうか。

「万博」というと、未曾有の大イベントだった昭和四十五（一九七〇）年の大阪万博が思い出されます。あのときのテーマは「人類の進歩と調和」でした。人間は無限の叡智をもっており、どこまでも進歩できる。自然さえも改造し、作り変えることができる……。当時は誰もがそう思っていたのです。

大阪万博の入場者数は、予想の三千万人を二倍以上も上回る六千四百万人余りでした。当時の日本の人口が約一億四百万人でしたから、国民の六割以上が万博に押しかけたことになります。誰も彼もが、科学技術の進歩によって、明るい未来がやってくると信じていたのです。ところが今回の万博の主催者側の予想入場者数はたったの七百万人です。大阪万博の十分の一、人口の六パーセント足らずです。どうやら主催者は、今の日本人は未来に対して、その程度にしか期待をもてなくなっていると感じ切ったのでしよう。

確かに人々は、かつてのように未来に対して樂觀的ではなくなっています。科学技術の発達や社会の進歩が、必ずしも仕合わせな未来に直結しないことを知っています。人間は自分の力では「人類の進歩と調和」を図ることができないのではないかと疑っています。そこで愛知万博では、「人間は自然の一部だ」という原点に戻って、人類が直面するさまざまな課題の解決を目指そうというのでしよう。

では、「人類が直面するさまざまな課題」とは何でしょう。その一つは、地球の温暖化や砂漠化、酸性雨、河川や海洋の汚染など、いわゆる地球環境の問題です。もう一つが、世界各地で繰り返される悲惨な殺し合いです。そして、それはすべて「人類の進歩」の結果として生み出されたものなのです。

二十世紀の前半は世界大戦の時代でした。それが終わると、それまで思いもよらなかったほどに人間活動の規模が拡大し、地球から膨大な量の資源が取り出され、利用されるようになりました。

一九五〇年に二十五億人だった世界の人口は、二〇〇〇年には六十億人を超え、今年の段階で六十四億四千万人に達しています。つまり、このわずか五十年余りで、世界の人口は約二・六倍、四十億人も増えたのです（ちなみに、二〇五〇年の世界の人口は九十三億人に達すると予測されています）。

では、なぜこうした人口爆発が起こったのでしょうか。それはいうまでもなく、科学技術の発達が人口の増加を可能にしたからです。そして人口の増大は、それだけ多くの人間が地球の資源を蚕食し、大量の汚染

物質を発生させ、膨大なゴミを投棄し続けることを意味しています。

一方、地球の気は対流圏ではわずかに十二キロの厚さしかありません。海洋の深さも、最大でわずかに十キロほどです。この、まことに薄い層に、微生物や日光では分解されない不自然な物質が大量に排出され、投棄され続けてきたのです。自然や人間に深刻な影響が出ないはずがありません。

「人類の進歩」がもたらしたものは環境の問題だけではありません。科学技術は、より効率的に、より大量に人を殺傷できる兵器も開発してきました。それらはパレスチナやイラクをはじめ、世界中の紛争地域で今も人を殺し続けており、紛争が終わった土地でも一億個ともいわれる地雷が爆発の瞬間を待っています。

これらの問題は、すでに大阪万博の時代からありました。当時も、人間が作り出した化学物質が自然に甚大な被害をもたらすことは知られていました。例えばアメリカでは、大阪万博の八年前にレイチェル・カーソン女史の『沈黙の春』が出版されて、大きな話題になっていました。

豊かな田園に春霞はるがすみがたなびき、森には鹿や狐が姿を見せる、そんな自然と一体となったアメリカの美しい町に、暗い影が忍び寄ります。ある日、突然家畜が死に、自然の中を駆け回っていた子どもたちが倒れはじめます。小鳥は歌わず、ミツバチの羽音も絶えた「沈黙の春」がやってきたのです。

原因はある日降り注いだ白い粉でした。当時アメリカでとめどもなく生産され、散布されていた農薬や殺虫剤です。白い粉が自然と共に生きるすべての生命に死の宣告を下したのです。この『沈黙の春』はアメリカで一五〇万部の大ベストセラーになり、二十の国で翻訳出版されました。

大量破壊兵器や地雷の問題もすでにありました。大阪万博の年は、当時最も非人道的な戦争といわれたビアフラ戦争があった年です。中東戦争が勃発し、イスラエルがスエズ地区を無差別爆撃したのも、この年でした。ベトナムでは北爆が再開され、米軍は死の粉、枯れ葉剤を大量に散布しました。

日本の国内も多難でした。万博が始まった三月の末には、赤軍派が日航機よど号を乗っ取って平壤に降り立ちました。七月には東京都が光化学スモッグ警戒体制を発令し、万博が終了する直前の九月にはスモン病を起す疑いから整腸剤キノホルムの使用と販売が中止されます。

すでに、日本にもアメリカにも、そして世界中に、沈黙の春は確実に忍び寄っていたのです。

しかし大阪万博の時代の世界は、そうした問題も「人類の進歩と調和」によって乗り越えることができる信じられていたのでしょうか。例えば、農業は無害なものが開発されるであろうし、紛争は国々の叡智を集めた話し合いで解決できると、楽天的に考えていたに違いありません。

それから三十五年という歳月が流れました。人間たちの「進歩と調和」を目指した叡智の結晶が積み重ねられた「はず」なのです。では、その営々たる努力は、どのような実を結んだのでしょうか。

地球環境は当時とは比べものにならないほど深刻な状態になっています。国際紛争も一向に解決の兆しが見えません。「人間の叡智」は「自分たちだけが便利であればいい」という自分勝手主義に対して、驚くほど無力であったのです。

愛知万博の「自然の叡智」というテーマは、こうした人間の無力さに対する反省から導かれたものでしょう。人間の力を信じすぎるな。人間には、してよいことと悪いことがある。欲望のままに便利さと利得だけを追求してはならない。まず自然との共生を優先せよ。自然に学び、不自然を排せ。人為がもたらした脅威は、人間が叡智をしばらく、我欲を抑えて解決を図る以外に道はない……。

これらは、すべて六十年前から、わが会が提唱しつづけてきたことなのです。今ようやく、その考え方が社会の良識になりつつあるという感慨とともに、今こそその実現に向かう最後のチャンスであるという身引き締まるような使命感が湧いてくるのです。

訂正 四月号の「倫風宏話」で、愛知万博の主権者側の予想入場者数を「七百万人」といたしました。これは「千五百万人の間違いではないか」とのご指摘をいただきました。訂正してお詫びいたします。